

---

# 呪の一族

霧野ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪の一族

### 【Zコード】

Z0168D

### 【作者名】

霧野ミコト

### 【あらすじ】

くだらない貴族にくだらない王、そして、くだらない国。そして、それをただ指をくわえて見る事しか許されない私。そんな私に舞い込んだ縁談。呪われし一族との縁談。果たして、その縁談の真意は？それを、私には解き明かせるのだろうか。

忌まわしき一族。

呪われし一族。

呪印の一族。

魔王の落胤たる一族。

そう呼ばれる一族が存在する。

その一族とは、ミネルヴァ公爵家。

黒の瞳と黒の髪を持つ一族。

その起源は、現在の中央大陸の霸者であるルードヴィッヒ王家が興る以前よりも存在していた。

そう言われるほどの旧家である。

ただ、その忌み嫌われている一族が今もなお存続していられるのは、ただ古いだけでなく、恐ろしく強大な力を持っているからである。

現在の領地、軍事力は軽く小国を凌駕りょうがしており、ここまで之力を持つている貴族をやすやすとは潰せない。

へたに刺激して、かみつかれて、大損害を受ける可能性が十二分にある。

けれど、その一族は、それだけではない。

遠い昔についたばずのもの。

鍊金術を扱うものすらいるのである。

鍊金術。

全ての物質を思い通りに変換する技術。

当然ながら、人間に出来る事ではない。すでに、神の領域である。

けれど、それを扱うものがいる。

それは、周囲にとつては恐怖でしかなく、何をされるかわかつたものではない。

そして、それゆえに、ミネルヴァ公爵家が忌み嫌われる事になった、

主因でもあつた。

「相変わらず、王宮は俗物の臭いでたまらんna」

私は、隣にいる男、筆頭執事であるキッシアにいぼした。

いつもの事だが、今の私は、王宮主催の宴に来ている。

一応、この国の貴族である、私も出席していた。

とはいっても、下流貴族の当主、しかも、年端の行かない子供である私は、会場の端に追いやられてはいるが。

まあ、だからといって、中心に行きたいとも思わない。

あんな、腐臭だらけの世界にいきたいと思えるわけがない。

「仕方ありませんよ。だいたい、この国の王 자체が、快樂に溺れた愚か者ですから」

キッシアも同じようで、厳しくそう切り捨てる。

だが、それもまた事実。

この国の王は、どうしたら、そこまで汚く存在できるのかが不思議なぐらい、愚かな王なのである。

それは、近隣諸国の中でも有名な事。

おかげで、国力もだいぶ落ちていて。

それでも、他国から侵略されたりしないのは、落ちてもまだまだ簡単に食いつぶせる国ではないからだ。

だからこそ、愚かであるのかもしれない。

潰される事など露と見てないから。

「ならその愚か者に頭を下げなくてはならない私は、一体何になるだろうな」

けれど、それなら、私は一体何なのだろう。

愚か者だと分かつていて、それでも頭を下げる私は何だ。やはり、私もただの愚か者なのだろうか。

「私の誇り高き主人です」

そんな私の内心をわかってるのだろうか、キッシアはこりとも笑わず、そう言つ。

その顔には、そんな自明な事をなぜ問いつ。そう浮かんでいるようだ。

もちろん、それは単なる「ごますりみたいなものなのだろう。自分の事は、自分自身がわかっている。

「そうか。それを聞いて安心した」

だが、それでも、嬉しかった。

もちろん、「ごますりを聞いたからではない。この男以外に言われたとしても、きっとそんなふうに思わないだろう。

この男だからこそ、意味がある。

この風変わりの筆頭執事であるキッシアだからこそ。

キッシアは最初から我が子爵家に使えていたものではなかった。素性の知れない流れ者だった。

もちろん、私の両親は見向きもしなかった。

けれど、私は違った。

この男の溢れんばかりの才覚を見てしまったからだ。

キッシアの見る世界は、全く別のものだった。

私が常々愚かだとおもつた国王ともその他の貴族とは違った。常に虚構の世界を見ていた。

世界の真理を見ていた。

だからこそ、私は欲しくなった。

私は、すぐに召抱えた。

もちろん、両親は反対したが、それも無理やり押し切った。

両親の反対を押し切つてまで欲しい人材だった。

最終的には、なんとか了承を貰つたが、もちろん、私の侍従でしかなかつた。

それが両親の最高の譲歩だった。  
けれど、それで十分だった。

キッシアは私が想像した通りすぐに我が家でのし上がり、気がつけ

ば、筆頭執事になっていた。

そして、その頃には、両親も若くして死に、私が当主となっていた。  
まあ、それを見て、陰謀だというのもいたが。

もちろん、信じてはいない。

そんなことをしなくても、確実に筆頭執事になっていた。  
ならば、わざわざ面倒な暗殺などをする必要性などない。

それに、キッシアは、殺しはしない。

子供である私とて、子飼いの手のものがいる。

その者情報と私自身で手に入れた情報の中で、キッシアは殺しは  
していない。

もちろん、戦や動乱の時は少々機会はあつたがそれ以外のときはし  
ない。

どこまでも効率的に考え方間だが、殺生は好まない。

そういう部分がある。

だからこそ、私は彼を選んだ。

そして、それと同時にキッシアの主人に相応しい人物になろうと思  
つたのだ。

「それよりも、旦那様もそろそろ身を固めてみてはどうですか？」  
パーティも佳境に入り始めた頃に、不意にそうキッシアが切り出し  
た。

「貴方様も、もう24。お世継ぎの事も考えなくてはなりません」  
そういうキッシアの顔はいつもよりも、やや真剣味がある。  
まあ、キッシアの気持ちも分からぬでもない。

今の我が子爵家には、もう私以外に、直系の子はいない。  
もちろん、親戚がいるにはいるが、直系ではない。  
血が途絶えるということになるのだ。

それだけは、どうしても、避けたいのだろう。

「ならば、適当にお前が見繕ってくれないか？お前の目なら間違  
がない」

当然、私にだつてそれぐらいはわかっている。  
ただ、今まで機会がなかつただけだ。

力を蓄えなくてはいけなかつた。

この腐敗しきつている今だからこそ、力をつけなくてはいけない。  
何があつても、自分の領地を、そして民を守るために。  
だからこそ、ゆっくりと時間をかけて、蓄えてきた。

もちろん、有力な家の娘との良縁があれば、そのままといふこともあつただろうが、それは叶わなかつた。  
やはり下級貴族では相手にはされない。

もちろん、たまに私たちの動向に気がつき、縁談を持つてくるものもいるが、それも全部取り込むための伏線でしかない。  
それが分かつていて、受けるわけにもいかなかつた。  
だから、今まで暇がなかつたのだ。

だが、今は違う。

ある程度力はある。

それこそ、そんじょそこらの中流貴族に匹敵するだけの物は持つている。  
だから、今なら取り込まれることはない。

まあ、もちろん、キッシアはそんな危険なものを選んだりはしないだろう。

キッシアの目は確かだ。

他の誰よりも人を見抜く目を持っている。

だから、この男に任せれば大丈夫だ。

もちろん、完全にキッシア任せにはしないが。  
最終的には、自分で結論を出すつもりでいる。

「そうですか。分かりました。なら、私のほうで適当に見繕わさせてもらいます」

キッシアは、私の答えに対し、そう頷くと、私の傍から離れた。  
そして、パーティもそれに習うかのように、終わりを迎えた。  
それから数週間のことだつた。

相手が見つかったとの報告を受けたのは、

肖像画を見た感じは、なかなかの美女だった。いや、まだ年このころは、20を超えてないとこころを考えれば、その表現では少しおかしいか。

まあ、それでも、年を重ねれば、間違いなくそうなることが約束されて、そうな相手である。

もちろん、容姿に対しても、何の不満もない。むしろ、こんな相手が妻となるのだ、喜ぶべき事である。

だが、素直にそう思えない問題もある。

確かに、肖像画にかかれているとおりならば、美女である事は違いない。

ただ、その容姿の一部に問題があるのだ。

黒髪と黒瞳。

そう、あの有名な一族、ミネルヴァ家の血筋を彷彿とさせるものだつたのだ。

そして、その予想を全く裏切る事無く、キッシアはこう答えたのだ。「ミネルヴァ家の唯一の直系嫡子である一人娘のサレイユ姫様です」と。

その言葉を聞いた瞬間、気が違えたかと思つた。

ミネルヴァ公爵家。

それは、この大陸にいるものなら知らぬものはいないとまで言われるほどの古家。

そして、それと同時に強大な力を持つ一族。

下手に関われば、自分の身どころか、周囲まで食われかねない一族だ。

それだけでも、十分度肝を抜かれたと言つのに、その相手が直系の嫡子だとは。

何の装備もなしに、腹をすかせている猛獣の前に突っ立つているようなものだ。

あつたりと食われるだけだ。

「キッシア、お前は何を考えて、こんな馬鹿げた縁談を持ちかけた？」

私は、目の前にいるキッシアを睨むようにしてみる。

期待を裏切られたような感が否めない。

キッシアに任せれば、ある程度まともな相手を探し出してくる。

そう思っていたのに、だ。

「当然、旦那様の、このドルバ子爵家のことを考えてござります。

」  
そんな私の事など見えていないのか、それともはたまだどうでもいいのか、冷静に答える。

「つまり、お前は、我が子爵家はミネルヴァ公爵家に取り込まれればいい。そう思っているのか？」

もしかすると、キッシアなりに、考えているところがあるのかもしれない。

けれど、私にはそれが全く予測つかない。

だからこそ、それが、逆にさらに腹立たしい。

「いえ、まさか、そんな事があるはずがないでしょ。むしろ逆です。私はミネルヴァ公爵を取り込むために、この縁談を持ちかけたのです。」

そして、その推測は正しく、キッシアはそう冷静に答えた。  
けれど、それはまた同じくして、馬鹿げた事ではあったが。

それでも、私は縁談の話を受ける事にした。

別に、自暴自棄になつたわけではない。

キッシアの言葉を信じただけのことだ。

キッシアはミネルヴァ公爵家を逆に取り込むといった。

もちろん、普通に考えてそんな事は到底不可能だ。

いくら力を蓄えたとは言々、ミネルヴァ公爵家と対抗できるわけがない。

素手で熊に真正面から戦いを挑むようなものだ。

ただ、それを分かつていて、キッシアが受けたのだから、それなりに秘策があるのだろう。

確實に、ミネルヴァ公爵家を取り込むだけの秘策が。

もちろん、キッシアが裏切ったと言ひ可能性がないわけではない。

ただ、そう考えると問題が出てくる。

ドルバの地を手に入れる必要性である。

いくら力を蓄えたとは言え、領地の価値は大してない。

それこそ、下級子爵家に相応しい程度のものだ。

よつて、欲しがるところは少ない。

それこそ、ミネルヴァほどの大貴族が欲しがるとは到底思えない。もちろん、領地自体には価値はないが、それ以外に何か価値のあるものを狙っているのかもしれない。

けれど、考へても何も浮かんではこない。

館には、それなりに値が張る骨董品も少々はあるが、それでも大した事はない。

それこそ、わざわざそこまで根回しする必要があるものなど一つとしてない。

伝承などに関しても同じだ。

信憑性のあるなしに関わらず、調べ上げても、大した物はない。

それこそ、いわくつきの場所なども存在しない。

よつて、今の段階では、裏切りの可能性は皆無なのである。もちろん、私が見逃している点もあるだろう。

だが、それはこの際、切り捨てる。

それは、よみきれなかつた私が悪いだけだ。

その結果として、ドルバ子爵家が取り込まれても仕方がない。

「サレイユ姫様が到着なされました」

もちろん、ただで取り込まれるつもりはない。

全てを自分の目でしっかりと吟味してからだ。

彼女を見た瞬間、私の中での時は止まってしまった。

見るもの全ての時間を食いつぶす。

そんな魔力を持つような女なのだ。

闇夜のように鮮やかで見るもの全てを飲み込んでしまった。そのほど  
艶やかな黒髪。

あたかも黒曜石を埋め込んだかのように澄み切った黒瞳。  
その瞳で一度でも見つめられてしまえば、その瞬間に萎縮してしまう。

全てを見透かされている。

そう思わせるだけの力がその瞳にある。

これがミネルヴァ家。

その存在感だけで一瞬に圧倒されてしまう。

肖像画で見たときは全く違つ。

あの肖像画には彼女を何一つ映し出していなかつた。

確かに、あそこに写っているのはまさしく彼女だろう。

けれど、あんなものでは彼女を映し出すのにあまりにも幼稚すぎる。

いや、彼女の本質を映し出すなど出来ない。

さすがは、この国の王ですら、ぞんざいに出来ない一族。

いくらしがない下級貴族とは言え、私とて実践を経験した騎士もある。

やすやすとはいつも萎縮する事はないが、それでも、この圧迫感。  
気を抜けば、一瞬にして食いつぶされてしまいかねない。

その存在感だけで。

「お前に手に掛かります。ドルバ子爵家当主レイス・フランジエ・  
ドルバです」

けれど、いつまでもそうしていては進まない。

内心の動揺を隠すようにして、彼女を向かい入れる。

「はい、レイス様ですね。私の名は、サレイコ・ミレ・ミネルヴァ  
です。気軽にレイと呼んでくださいません」

そんな私の動搖に気付いていないのか、それとも慣れきつたことなのか、微かに笑みを浮かべると軽く会釈してそう答える。

その一つ一つの仕草はどれも洗練されたもので、都会の華やかさを物語る。

けれど、それはどこか退廃的で、なぜか哀愁にも満ちているようと思わせる。

「それでしたら、私の事も気軽にレイスとお呼びくださいませんよ」

しかし、それも都会独特のものなのだろう。  
ああいつた華美な世界は常に隆盛と衰退が交互に押し寄せるものだ。  
そんな世界にいるからこそ、自然とそうなってしまったのかもしれない。

気にするだけ無駄だ。

「いえ、夫となる方にそのようなお呼び方、出来ません」

それに気にするのは、彼女のひとつなりと狙いだ。

それがはつきりとしないと困る。

ただ、今のところ彼女は、この縁談を受ける気ではないらしい。  
まあ、実際のところはわからないが。

あくまでもそういう形をとっているだけという可能性もある。

「それなら、お気になさらないで下さい。むしろそんなふうに他人行儀にされてしまつては、こちらとしても悲しいです」

まあ、どちらにしろ、こちらとしては否定的な返答はまずい。  
情報が少ない現状では、受け流す事が最優先だ。

日が傾き夕刻になると、彼女は屋敷を去つた。

本来ならば、もてなす必要があるのだが、今回はそれは延期となつた。

彼女の方に次の用事があつたからである。

体よく断るための文句と考える事も出来るが、この際それは切り捨てておく。

彼女はおそらく、無駄な事はしないだろう。

わざわざしない下流貴族のところに無駄に足を運ぶ事はない。

話してみて分かった事がある。

彼女はかなり頭がいい。

気を抜けば、確実に負ける。

そんな相手だ。

こんな思いをしたのは、キッシアの時以来だ。

ただ、だからこそ逆に諂しく思う。

これほどまで頭のいい彼女。

そんな彼女がどうしてこんな縁談を受けたのか分からない。

周囲が愚鈍で使えないものばかりだったため、自分が拒否する間もなく薦められてしまった。

そう言うことも考えられるが、彼女がそんな羽目になるような隙を見せるとも思えない。

はつきり言つて余計に謎が深まる。

ただ唯一いえることといえば、確実にキッシアに似ている。

別に容姿が似ているといつわけではない。

ただ、纏っている雰囲気だ。

口振りはどこにでもいるような貴族の令嬢。

けれど、纏っている雰囲気は全く違う。

なんとも形容し難いものを纏っている。

そして、それはキッシアも同じようなものなのだ。

やはり、キッシアはミネルヴァ家のゆかりのあるものなのだろうか。いや、そういう言い方はないだろう。

確實に、ゆかりはある。

そうそうこんな雰囲気を纏えるわけがない。

ある程度予測していたとは言え、少々まずくなつてきた。

キッシアが裏切ったとは思わない。

この状況ではまだ、そう思うには、まだ時期尚早だ。

いまだに狙いが分からぬ状況で、簡単に決断を下すのはまずい。

「お前、ミネルヴァ公爵家所縁の者だったんだな  
やはり、ここでも情報が必要だ。」

「はい。分家の分家の者ではござりますが、確實に名を連ねておりました」

キッシアは私の問いに対して逡巡する事無く答えた。

当然のことのように。

自明な事を聞かれたように。  
もちろん、通常ならば、ここで真偽のほうを確かめなければならぬだろ？。

けれど、キッシアは決して嘘はつかない。

いや、単に私が気付いていないだけのかもしれないが、私の中では確実に今までついた事はない。

それに、嘘をつく必要性などないのである。

私の問い合わせで確認のものでしかないのである。

「どうか。ミネルヴァ家の者は、大抵あんな感じなのか？」

『なぜ言わなかつたのか？』

そんなことは聞かない。

聞いても意味はなさない。

答えはわかっている。

『貴方様がお聞きになりませんでしたから』

これ以外にありえない。

それに、もつと重要な事がある。

ミネルヴァ家の人間性について知つておかなくてはならない。

それによつて、動き方を変えなくてはならない。

「はい」

それに対し、キッシアは簡潔にそう答えた。

こんな考え方をしたということは、まだ何があるのだろ？。

ただ、聞いても無駄だろ？が。

自分の口からは言えないから、そつ答えているのだろうから。

「そうか……」

それにして、正直やりにくい。  
彼女のような人間ばかりがいる。

まさしく状況としては最悪だ。

彼女一人なら、まだなんとか対等にやりあえるかもしない。

いや、こんなところで見栄を張つてしまつても無駄か。

はつきり言えば、彼女一人ですら、自分の手におえるのか分からな  
い。

確実に、彼女はまだ自分の手のひらを全く見せていない。

正直言つて、かなり分が悪い。

だというのに、さらに彼女のような人間が増える。

はつきり言つて、確実に負ける。

まだ、彼女一人だけか、または、数人程度で後は、大した事はない。  
そういうのなら、どうにかできるかもしねいが、この状況では完  
全にお手上げだ。

足を引つ張り合いさせて、内部から切り崩せない。

一枚岩とまでは言わないが、確実に、私とやりあうとなれば、完全  
に一丸となつてくるだろう。

活路が到底見出せない。

「もう一度聞く、この縁談は、ドルバ子爵家のためにあるのだな？」

ただ、唯一の救いというのが。

「はい、当然です。」

このドルバ子爵家のためになるということだ。

もちろん、嘘である事を考えなくてはいけないが、やはり可能性は  
薄い。

理由は、以前言つたとおりだ。

それに、そんなことよりもっと別の事を気にしなくてはならない。

ドルバ子爵家のためになるとはいっても、家を存続させるとは限ら  
ないからだ。

ドルバ子爵家はここで取り込まれるのが最もいい。

だからこそ、この縁談はドルバ子爵家のためになる。

そういう意味での答えだということもありつるのだ。  
それを忘れるわけにはいかない。

もちろん、ミネルヴァ公爵家を逆に取り込む。

そうとも言つていたが、そうしようとはしましたが、旦那さまの力不足で逆にそうなつてしまつた。

私の思惑通りに動かなかつた。

それだけのことです。

そういうわれてしまえば、なんとも言い返しようがない。

そうなれば、キツシアは一言も嘘をついていないのだから。  
全ての可能性を考えておかなくてはならない。

そうでなくては、確実に自分が望まない方向へと向かう。

それだけは、どうしても止めなくてはならない。

それから何度もまた彼女と会つた。

もちろん、それにかこつけて彼女の家も訪れた。  
彼女の家人間の観察だった。

もちろん、最初から期待はしていなかつた。

むしろ確認のために行つたでしかない。

周りの人間の能力を。

けれど、これがなんとうまくいったのだ。

だいたいの彼女の家の力の構図が分かつた。

頭の切れに関しては彼女が一番だつた。

まあ、だからといって、油断できる相手でもなかつたが。

それでも、彼女以上のものがいないと言つだけでも、十分安心材料だ。

もちろん、彼女以上の人間は、隠れていたり、本性を隠していただけの可能性もあるが、それはこのさい抹消しておく。  
時間が足りなさ過ぎるからだ。

縁談の話がうまい具合にどんどん進んでいつているのだ。

向こうは最初から乗り気であり、それに合わせるようにして、私は

彼女に会いに行っている。

進まないほうがおかしい。

最近では、式の日取りをそろそろ考えては、などとこつ話も出でている。

もちろん、今の状況では頷けないので、適当に濁しておいたが、それにだつて限度がある。

いつまでも、ごまかしは効かない。

だから、そろそろ狙いを探し出さないといけない。

けれど、それでも、やはりうまく絞りきれない。

ある程度、予測は立てているが、どれも最後の押しが足りない。

今のところ考えられる可能性は三つ。

一つは、彼女が私に一目ぼれをした。

二つは、彼女を私のところに嫁がせることによって、家をのつとるため。

三つは、婚姻関係を結ぶことによって、強制的に開戦される戦の最前線に向かわせる。

けれど、この三つはやはりどうもこれだといつものはない。

一つ目は、彼女の私を見る目を見たら分かる。

あれは、恋した女性の目ではない。

それに、それだけならば、周りが反対することはまず間違いない。

二つ目は、彼女の家に行ってから思い浮かんだことだ。

彼女の頭の切れは抜群だ。

そして、周囲もまた同じくだ。

彼女ほどにないにしても、抜群の切れを持つている。

よつて、何人か協力すれば、彼女を追い出すことは可能だ。

だが、やはりこれも最後の押しが足りない。

彼女が乗り気だと言つことだ。

彼女はこの縁談に乗り気である。

もし、周りからの陰謀なら、全く逆のはずだ。

もちろん、なんらかの弱みを握られているため。

そういうことも考えられるが、それでも、心の機微が少しづらりと出てきてもおかしくない。

けれど、彼女は、それを全く出していない。

よつて、これも、却下される。

そして、最後。

これは、最近耳に入ってきたことだ。

ミネルヴァ一族が今度の戦に出撃命令が出ている。

そのための戦力強化。

そうとも考えられる。

今更ちまちまと増やしていくよりかは、一気に吸収してしまおうが楽だ。

それに、先鋒を私のところにしてしまえば、損害も少なくすむ。だからこそ、力はあっても、簡単には縁談を断れない私のところに来た。

そういうものだ。

けれど、もちろん、これにだつて問題はある。

それは、今回の戦に出撃命令が出ているのは、ミネルヴァ一族だけ。他には手出し無用となつていて。

もちろん、ミネルヴァ一族で十分勝てる。

それは、決して向こうが弱いのではなく、ミネルヴァ一族が強すぎただけのことだ。

とはいっても大損害が出る。

それは周知の事実だ。

そして、それを分かつていて国王がどうして、そういうふたか。

それは、ミネルヴァを潰すためである。

ミネルヴァの影響力ははつきりいつて、最強だ。

それが国王にとつては邪魔なのだ。

それを消し去る、そのためになんことをしているのだ。

そして、そんな状況下で、私を参戦させることなどできない。

もし取り込もうとすれば、その瞬間にたたかれてしまうことは間違

いながらである。

まあ、もちろん、力でねじ伏せれば構わないかもしれないが、そんな力技を彼女たちがするとは考えられない。

そんなにイヤならば、いろいろと方法があるはずだ。

無茶なやり方はきっとしない。

よつて、この可能性も消える。

まあ、現状はこんな感じだ。

まったく進んでいない。

「旦那様。サレイユ姫様が起こしになりました」

と、それはいいとして、どうやら、約束の時間が来たらしい。

「分かった。応接間へ通してやってくれ」

私は立ち上がると、キッシアにそう答えた。

そして、私とレイの婚姻が決まった。

もちろん、彼女のほうが私のところに嫁ぐ。

それはつまり、まず、つぶれることは無かつた。

もちろん、取り込まれると言う可能性が残つてはいるが、それでも、家が断絶することはない。

それが、いいか悪いかとは別にして、ドルバの名が消えることは無くなつた。

ただ、それと同時に厄介なものを抱えることになつた。

通常、婚姻の場合、嫁ぐほうが持参金を持つてくる。

つまり、今回は、彼女がドルバに嫁いでくるので、この場合、彼女が持参金を出す。

そして、その持参金が問題だつたのだ。

彼女の持参金、それは・・・

ミネルヴァ一族が持つ領地全てだつたのだ。

その話が決まつた翌日に全てが分かつた。

いや、聞かされたというほうが正しいかミネルヴァ一族の正体を。

## 鍊金術。

それはあらゆる物質を己が思ひままに変化することができる、禁断の神の魔術。

そして、それを扱う一族がミネルヴァ一族。

それは、貴族ならば誰でも知っている話だ。

けれど、それはことの本質とは全く違っていた。

禁断の神の魔術なんか存在しない。

むしろ、それは・・・

悪魔の呪いだつた。

私は、隣を見る。

そこには、レイの姿がある。

ミネルヴァ公爵家の屋台骨でもあるカッスラー。

肥沃な大地と豊かな水に恵まれた、王国でも屈指の穀物庫。

そして、そこよりもずっと奥に行つた場所。

カッスラーよりももつと奥の世界。

荒野の大地。

二ルベルツシユ。

ミネルヴァ一族の根源と為す世界。

そこに、私とレイはいる。

呪いの根源を碎くために。

そう、鍊金術はただの呪い。

自分の触るものを変質させてしまうのだ。

そこには、自分の意思は介在しない。

勝手に変質させてしまう。

そして、それと同時に破壊する。

血の耐性を持つもの以外に触れるることは決してできない。

血の耐性を持つ物以外に触れたなら、それは、やはりその瞬間に変質してしまうから。

消えてなくなってしまうから。

私は、剣を抜くと、目の前に現れた、異形の者を切り捨てる。

やけに甲高い断末魔を残したそれは、それつきり動かなくなる。

『宝剣グレイプニル』

その昔、まだ神がこの世界と交流していた頃に、残していった聖剣だという伝承が残っている。

私は、これを受け取つた。

呪いをかけた者を殺すべく。

そう、ミネルヴァ一族との縁談の本意はここにあつた。

私も知らなかつた真実。

ドルバの血の真実。

それは、純粹な血を守り続けたミネルヴァ一族。

呪いをうけず、綺麗な血であり続けた一族。

それがドルバ。

そして、その嫡男であつた私に白羽の矢が立つたのだ。  
その私の教育のためにあてがわれたのは、キッシア。  
そして、私はここにいる。

全ての現況を消し去るために。

キッシアはいつた。

この縁談はドルバのためだと。

それは、事実だつた。

この縁談を受けなければならなかつた。

終止符を打たなくてはならないから。

これ以上、ミネルヴァ一族は肥大していつてはならない。

ミネルヴァ一族の力は強大な故に、破滅を呼ぶ。

絶対的な力を持つ物の存在は許されないので。

絶対的なものの存在はやがて、欲を肥大化させる。

肥大化された欲は、全てを飲み込み、そこには、何も残らない。

何も生み出されない。

全ては終焉へと導かれる。

だからこそ、この縁談はドルバのためなのだ。

ドルバも終焉へと巻き込まれるから。

だから、私は今ここにいる。

奥へ行けば行くほど、異形の者の数が増えてくる。

もういつたいどれほど斬つたのか分からぬ。

それこそ、この剣を持つていなければ、体力切れで倒れてしまいかねないほどだ。

神からの祝福を受けているから。

彼女は言った。

異形を切るのは今のところ、この剣だけだと。

神の一振りだからこそ、斬ることが可能なのだと。

そして、この剣を使えるのは、ミネルヴァの血を受け継いだものだけだと。

しかも、呪いを受けていない純粹な血を持つたものでないと。

呪いによって、力が相殺されるから。

だから、使えるのは私一人。

唯一純粹な血を持った一族の者だから。  
最後の一匹を薙ぎ払うと、立ち止まる。  
目の前には大きな石碑が佇んでいる。

「これが、元凶か」

それをみて、思わずポツリと、つぶやくと、横にいる彼女はこくりと頷く。

その石碑自体が、呪い。

この石碑を碎かなくてはならない。  
けれど、砕けばいいわけではない。

元に戻してから出なくては意味はない。

この石碑は変化させられたもの。

皮肉にも、呪いのおかげで、元凶を封じたのだ。  
彼女がそっと石碑に触れる。

石碑は騒がしく音を鳴らす、やがて姿を変質させていく。

先ほどまでいたものと同じく異形のもの。

けれど、先ほどまで以上に醜態な姿。

見るもの全てに生理的嫌悪感を抱かせる存在。

「はあ！？」

氣合の瓶と共に闘合いを一気に詰める。

「呪いを放つ氣です!!!」

後ろにいるレイが悲鳴のようになんとう叫ぶ。

けれど、私はそれを体をひねることでかわすと、突き出されている手をまず切り落とす。

『元ニサセシ』

そのとたん異形が悲鳴を上げる。

その液体に触れた大地は腐っていく。

この大地が荒野と化してしまったのは、どうやら、この異形のせいのようだ。

私は、まだ声を上げ続けている異形の首を掴むとそのまま押し倒す。

そして、その剣を胸につきたてる。

それと同時にあげた異形の悲鳴は、ほとんど凶器だった。まるでマンドリーライフを抜き去つたとき回じよつなものだ。

「グレイプニルよ、今ここに浄化の光を！！」  
そう声高に叫ぶ。

本体であるこの異形は、斬るだけでは足りない。

淨化までしなければ、終わりではない。

断末魔の声が辺りに充満する。

凶悪な声。

鼓膜が裂けそうなほど凶悪な声。

必死にこの地にしがみつこうとする醜態な声。

『ああああああああ・・・!』

けれど、その声もついに途絶える。

完全に消え去っていた。

異形の姿は。

「終わったのですか?」

剣の汚れを先ほど脱ぎ捨てた服で拭うと、鞄に戻し、振り返ると彼女はこわごわとそう尋ねる。

頭の切れるとはいえ、やはり女性は女性、じついう体験したことなど無かつたのだろう。

恐怖感が抜け切れてないのは仕方ないだらう。

「ええ、無事に。その証拠に」

私は、そう答えると、手袋をはずすと、彼女の手に触れる。驚いたように、引っ込めようとするが、私はそれを離さなかつた。それが証だからだ。

彼女の、ミネルヴァ一族の呪いが消え去ったこと。

翌年、私とレイの婚儀が行われた。

それは、とても華やかな物だつた。

今まで呪いに苦しんできた者達が、開放に酔いしれていた。

そして、ミネルヴァ公爵家は解体された。

解体された後は、もちろん、ドルバ家に吸收された。それと同時に、爵位も取り上げられることになつた。呪いを祓つた後に起きた戦で戦功を立てたからである。

そして、それと同時に、今回の婚儀での領地拡大。

それによって、私たちドルバ家は、伯爵と名乗ることを許された。

まあ、本来、領地の贈与は許されてはいないのだが、ミネルヴァの

特例。

消えたのろいの存在を知らない王国は、ミネルヴァの力を恐れ、しぶしぶ了承したのだ。

それに、今の王国の事など、正直興味はない。にらまれようがどうしようが、関係ない。

私は革命を起こす。

この腐った王国を再建するために。その手はずも着々と進んでいる。

「旦那様。ディール殿下との会合の時間です」

キッシアの私を呼ぶ声が聞こえた。全ては着々と進んでいく。

折角手に入れた力。

それを使わなければ、もつたいたい。

私は、思わず微笑する。

「レイス様？」

それを見て、訝しがるのは、レイ。

今彼女に、あのときの鋭さはない。

けれど、それも必要ないだろう。

彼女は、もう呪いに苦しむことはない。

無駄に考える必要などない。

ここから先は、私だけで十分。

「私は、これから国を変える。くだらない王にくだらない王国。そんなものは、存在させない。そんな私を支えてくれるかい？」

そう、彼女にはそれだけでいい。

私をそつと支える。

それだけでいい。

「はい」

それに対して彼女は頷き答える。

その一声で力が沸く。

これが夫婦と言うものなのかもしない。

キッシアに感謝しなくてはならないのかかもしれない。

「ありがとう。それじゃ、行ってくる」

そして、私は殿下の元へと向かった。

「私たち一族に平和をもたらしたよう」、この国にも平和を  
「

レイのその言葉を背に受けながら……

(後書き)

うーん、長くなりすぎたなあ……  
でも、割かし、こいつのつて好きなんだよね。  
書くのは疲れるけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0168d/>

---

呪の一族

2010年10月14日21時25分発行